

# フィリピン・ネグロス島ギフルガン市トリニダッド 山岳地域の農家たち

国際学部 4 年 N. F.

## はじめに

ギフルガン市トリニダッドに来る以前、私は西ネグロスのバゴ市ドゥラオ村に居た。ここでは大土地所有制のサトウキビ畑で働く小作農家と農場労働者、そこで有機農業を広めようとする学校 : Mother Consuelo Asian Rural Institute(以下 MC-ARI)を設立したシスターにお話を伺った。MC-ARI の敷地内では有機農業が行われているが、その周りは農場労働者が働くサトウキビ大農場に囲まれていた。サトウキビ大農場のモノカルチャーでは、畑の生物多様性が失われ、広い土地で働く労働者は化学肥料・農薬に頼らざるを得ない。シスターは持続可能性の高い有機農業を教えるスキルを持ち合わせていたが、なかなか周囲に広めることができないでいた。そこで、農民たちは化学肥料や農薬の危険性も有機農法の利点も理解していないために、入手しやすい化学肥料と農薬を使用した農法を選択しているという仮説を立て、聞き取り調査を実施することとした。

## 1. 東ネグロス州ギフルガン市トリニダッド村

私は 3 月 13 日から 16 日までの 3 泊 4 日をこのフィリピン・ネグロス島ギフルガン市トリニダッド村で過ごした。ここは中山間地域で、多くが大土地所有制の元で働く小作農家である。彼らの多くは山の斜面を棚田や畑にし、米やトウモロコシなどを生産している。

## 2. トリニダッド村の農業 : 聞き取り調査から

私は、同村で助産師として働く R さんの通訳の元、インタビューを実施した。主な質問は、ドゥラオ村で実施した際と同様に、所有する土地の有無、農薬や化学肥料を使用しているか否か、その入手場所、一度の栽培で撒布する回数や量、撒布による収穫量の変化、収入、外部からのサポートを受けているか等である。事前に、トリニダッド村の村長等にフィリピンの種子市場に多く出回っている遺伝子組み換え種子について尋ねた。彼らによると、この地域では遺伝子組み換え種子を使用している農家は居ないということであった。また、村長等には遺伝子組み換え種子が市場に流入することを懸念している人もいた。

私は同村の自作農家 4 人の方にお話を伺った。インタビューを通して、ドゥラオ村で見たサトウキビ畑の地主と農業労働者の産業構造とは、少し異なったタイプの構造があることが分かった。また、その中で生きる彼らを取り巻く暴力が見えてきた。

## 自作農家の W さん(男性)

彼は、3~4 ヘクタールの土地と灌漑施設を持ち、そこで野菜や米を栽培している。彼の父

が CLOA を取得した。CLOA とは、フィリピンの農地改革法に基づく土地所有裁定証書で、その土地の持ち主を証明する書類である。彼は、田んぼに毎月一回、化学肥料と農薬を散布しており、散布しない場合よりも収穫量は良いという。それらの入手方法は、地元のマーケットで購入するか、またはギフルガン市の農民組織 KMMT (Kaponongan Makugihon Mag-ouma sa Trinidad) から配給されるものを使用している。トリニダッド村では、農民への支援として作物の種子、農薬などを配布している。配布される種子や農薬は、農家が自分で選ぶことができないため否応なく 1kg 当たり 10 ペソにしかないトマトを栽培していた。彼の経済状況は厳しく、労働者を雇わずに息子 2 人と共に畑で働き、副業として大工もしている。

### ハイブリッド種子農家 L さん(女性)

“ハイブリッド”の種子を使用していると言う L さん(女性)は、地主から借りている 2.5 ヘクタールの土地で米や野菜を生産している。彼女は灌漑施設を持っているが、トリニダッド村では、灌漑施設を持たない人も多いのが現状である。

中山間地域で暮らす彼らにとって灌漑施設の有無は主食である米を生産できるかできないかに関わってくるため重要だ。灌漑施設を持たない者は、乾いた土でも栽培できるようなトウモロコシなどの野菜や、家畜を売って現金を得ている。この地域の灌漑施設は、資金があれば自分で建設することも可能だが、資金調達が困難なものは政府が建設してくれるか、外部団体などが建設を支援することもある。L さんの場合は、International Committee of the Red Cross(以下 ICRC)が建設した。

彼女の地主はネグロス島の東隣に位置するセブ島に居り、トリニダッドに 26 ヘクタールの土地を所有している。バゴ市でのサトウキビ農場労働者と異なる点は、育てる作物や使う肥料・農薬・種子に自由が与えられている点だ。彼女はハイブリッドのとうもろこしを主に生産している。野菜への肥料にはコンポストのたい肥やもみ殻を使用しており、家畜のエサは街の雑貨店で購入する。米には収穫までに 2 回、KMMT から配られる 1 缶 6ℓ の農薬を撒いているそうだ。それら生産したものを現金にしたときの 25~30%を地代として地主へ送っている。

彼女の話では、主に生産しているトウモロコシは、ハイブリッド種を使用しているそうだ。この種子を使い始めてから以前使っていた種子に比べて実の大きさは 2 倍以上に、害虫も付かず、収穫量も上昇した。L さんがハイブリッド種を使い始めて 2 年が経つが今のところ問題はない。また、彼女はラウンドアップという除草剤をハイブリッドトウモロコシの畑に使用している。このラウンドアップという除草剤はアメリカのモンサント社の製品だ。ラウンドアップを散布されたあらゆる植物が根から枯れるため、大農場を経営する農家には便利な製品として知られる。実際に L さんの畑を見せてもらうと、ラウンドアップを散布した畑にハイブリッドトウモロコシが育っていた。彼女は種子のパッケージをすでに廃棄してしまっていたために実物を見ることはできなかったが、畑の様子から推測でき

ることがある。彼女の言うハイブリッドトウモロコシの種子は、ハイブリッドではなく、ラウンドアップを撒布しても枯れないように遺伝子操作された遺伝子組み換え種子であるということである。

世界には、遺伝子組み換え作物を摂取することによる身体への安全性が証明されていないという理由で、遺伝子組み換え種子の利用どころか遺伝子組み換え作物の輸出入さえ禁止されている国もある。しかし、フィリピンでは 2002 年から遺伝子組み換えトウモロコシが栽培されている<sup>1</sup>。L さんの住むトリニダッド村の村長等は同村で遺伝子組み換え種子は使用されていないと言っていたが、L さんの使用する種子が遺伝子組み換え種子ならば現状は変わってくるだろう。

L さんの使用する種子は、ネグロス島の南に位置するミンダナオ島から、親戚や知り合い伝いで入手している。1kg 当たりの価格は、一般的なトウモロコシの種子の 10 倍もする。現在は彼女らの家族が食べるための生産だが、これから販売も視野に入れていくという。L さんの畑の様子を見て、近所の農家にその種子を使いたいと申し出る人もいる。

オルタートレードジャパンによると、現在フィリピンで生産されるトウモロコシの 4 分の 1 がモンサント社の遺伝子組み換え種子である<sup>2</sup>。フィリピンの遺伝子組み換えトウモロコシを生産する農家は、農薬を素肌に浴びたり、そのトウモロコシを食べることで体調不良に陥る例や、まだ実証された訳ではないが、そのトウモロコシを与え続けたカラバオが原因不明で死んでしまったという例もある。また、その種子の使い始めは収穫量も好調だが農薬を使い続けることで土壌の生物多様性が失われ、土が痩せ、収穫量も減ってしまう可能性が高いとも言われている。そうすると更に強い農薬を購入せざるを得なくなり、借金をするか、土地を売却せざるを得なくなった例もある。ICRC は L さんに使用を止めるように勧めているが、L さんは使用をやめなければならない理由を理解できていないようだった。

### 小作農を営む N さん(女性)

N さんが住むのは、同じトリニダッド村の少し離れたところにある集落で、トリニダッド村の公共施設がある中心地からは歩いて 2-3 時間かかる。この集落の人たちは中心地へのアクセスが難しいことから経済水準が特に低い。N さんは、これまで紹介した人々とは状況が異なっていた。彼女は自分の畑の大きさも知らず、地主には何も納めていない。なぜ何も納めなくてよいのか本人も分かっていない。恐らく彼女の知らないところで地主が変わってしまったなどにより、今の状況が起きてしまっているのではないか。誰が地主であるのか、なぜ何も納めなくても良いのか、実は調べれば分かることだ。それなのにも関わらず、地主は分からないままにされている。彼女は灌漑施設を持たないが、地主にお金

<sup>1</sup> ALTER TRADE JAPAN(2015) 「フィリピン最高裁、遺伝子組み換えナスの栽培実験禁止と新規容認一時停止を決定」

<sup>2</sup> ALTER TRADE JAPAN(2015) 「遺伝子組み換えイネ:ゴールデン・ライスの危険」, <<http://altertrade.jp/archives/9294>> 2016 年 1 月 10 日アクセス

を収める必要もないため一見幸運のように思える。しかし、彼女は街から離れたところに住んでいるため KMMT のミーティングに参加することができず支援を受けられないでいる。子どもの奨学金や生活費を支援している 4Ps も、農薬や肥料、種子の支給をしている KMMT も、週に一度のミーティングを行っており、支援を受けるにはその参加が義務付けられているのだ。N さんは子育てと仕事に追われ、ミーティングに参加するための時間を割くことができない。経済的理由から農薬や化学肥料の使用もできない。ここトリニダッドに来て初めて有機農家に出会えたと思ったが、理由はポジティブなものではなかった。

### 3. まとめ

トリニダッド村に来る前に滞在していたバゴ市とはまた違う暴力がここには顕在しており、住む土地柄が如何に生活に影響を与えているかを実感した。このインタビューから得たことをもとにまとめを以下に書きたい。

この村では、バゴ市と同じく大土地所有制が根底にあり、そのため労働者は自分の土地を持つことができず、制限された中で農業を営み、暮らしている。その制限された中でもよりよく生きるための措置をそれぞれが取っていることが見られた。例えば、ラウンドアップという除草剤と共に遺伝子組み換え種子と見られる種子を使用している人々が居た一方で、住んでいる地域が理由で外部の支援を受けることが難しく、厳しい生活をしている人々も居た。

遺伝子組み換え種子に関して世間では、消費者の立場から安全性が証明されていないことが指摘され、遺伝子組み換え種子の使用は否定されることが多い。この、遺伝子組み換え種子反対派の議論の中で置き去りにされているのは、農家側であると思う。農家の目線で考えてみれば、一日三食やっと思われられるような経済状況で少しでも収穫量を増やしたいと思うのは当たり前なのである。そこに偶然遺伝子組み換え種子が市場に入ってきたら誰でも関心を持つだろう。わたしはこれまで、遺伝子組み換え種子はその種子企業や、種子企業と手を結んだ政府や自治体の一方的な取り決めで市場に流入していると思っていた。しかし、実際は農家側にもニーズがあり、農家は藁にも縋る思いでその種子を選択していることが分かった。また、N さんが地主を調べない理由には農場労働者が大土地所有制に頼って生活していることが挙げられる。地主が分からなくて収入の一部を収めなくて良いならそちらの方が良いだろう。誰の手助けも受けられずに、大土地所有制の下で生活することはかなり苛酷なことで、このような状況下にある農場労働者は彼女だけではないことも推測できる。それらはすべて、大土地所有制の下で暮らしていくための彼らなりの対処法なのである。彼ら農場労働者にとって、まず今日を生きることが最優先になってしまうため、外部からの支援も子どもの学費や生活費の支援、農業生産に必要なものの支給など、大土地所有制がある前提の支援の在り方に偏らざるを得ない。また、大土地所有制を改革する農地改革法が何度も行使されても、大土地所有制に依存している権力者や農場労働者たちのニーズがあるためなかなか大土地所有制は無くならないことが分かった。

それに対して私にできることは、農薬や化学肥料やハイブリッド種、遺伝子組み換え種子に対して反対意見を持つ人が増えている中で、実際には農家側にニーズがあることもあるということ、また同時に農家はその種子や農薬や肥料がどんなものかを知らずに使用し続けている現状を外部に発信していくことだと思う。それによって、フィリピンの大土地所有制がスペインによる植民地時代に起こっていた過去の問題ではなく、現在にも深く強く残っていることをよりポピュラーな国際問題として見られるように努めることができるのではないか。